

「みえ生と死を考える市民の会」会報

# ひまわり



## 第15号

発行  
平成25年2月1日  
発行責任者  
大西和子  
連絡先  
伊勢市御園町高向927

### 発足一四周年記念講演会

第一四回「みえ生と死を考える市民の会」記念講演会は、平成二十四年七月八日（日）三重県総合文化センター中ホールにおいて開催いたしました。当日会場には、会員、非会員を合わせて四〇〇名を越える方々が参加されました。

講師佐治晴夫先生のソフトな語り口と映像、音楽を挿入しての豊かな雰囲気の中での講演に参加者みんなが、引き込まれて行きました。

### 講演

#### 『いのちという名の万華鏡』

—人間の不思議を考える—



講師  
鈴鹿短期大学 学長  
佐治 晴夫 氏

美しくさわやかで、たおやかな女性の歌声「ふるさと」が会場に流れ、講師によるパツ

ハのプレリユードのピアノ演奏とJAXAの月探査衛星「かぐや」の映像で講演が始まった。

皆さんこんにちは。あがってしまつてピアノ間違つてしまいました。でも、この後にプロピアニストに弾いてもらいますから、良かったかなと思つております。今私がチョットだけ弾きましたのは、一九七七年に私が関わりましたボイジャー計画の探査機に搭載した「パツハのプレリユード」という曲です。

現在ボイジャーの位置は、我々の所から二百億km離れた位置です。二百億kmというと、光の速さで走つても十一時間かかるところにボイジャーは行っています。そして今から二九万六千年後に冬の星座でおなじみのシリウスという明るい星に着くのです。

その途中で誰か宇宙人さんがいて、ボイジャー君が持つている情報をもしまく取り出してくれたら、地球からのメッセージというので、自分たち宇宙人の他に生き物があるのかなと分かつてもらえるのではないかと、「パツハのプレリユード」をはじめとした音の情報として、一枚レコードが積み込まれたわけです。

さて、先ほど見ていただいた地球は、三年前に撮られた映像です。

JAXAという日本の宇宙科学の中心的な組織で、もとは東京大学の宇宙科学研究所が母胎になって打ち上げた、月を調べるための衛星として「かぐや」がありました。

「かぐや」が地球から打ち上げられ、月のことを沢山調べ、殆どの任務を果たしてしまつて電池も切れ、いよいよ任務を終えるときが今から三年前に決まりました。そして地球からの信号で衛星「かぐや」は、月の表面に激突をして、木っ端微塵に壊れ一生を終えるわけです。その「かぐや」が、壊れる前つまり一生を終える前に自分を生み出してくれたお母さんの地球を最後に見た映像です。

一九七七年に打ち上げた「ボイジャー」、一九九〇年に太陽系を離れるときに「お母さんである地球の方を振り返つて」というプロジェクトがNASAであり、私もそれに関わったことがあります。それがヒントとなつて、「かぐや」にも最後にお母さんである地球を見せようということ撮った映像です。この非常に美しい地球の映像を撮つた一時間半後に「かぐや」は一生を終えています。そのような記念になる映像をお見せしました。ここにいらつしやる全ての方が、あの青い水の玉の上にならつしやるということなんです。

我々はこういう美しい地球上にいますが地球の外に出ない限りあの映像を見ることはで

きません。

## 地球・災害と自然・中庸の大事さ

地球は外から見るとあんなにきれいなのです。大きさは約一万三千km。一万三千kmといっても、なかなか感覚的にピンと来ません。例えば地球の大きさを直径1m位のボールに例えると空気層は1mm位しかなく、その空気をみんなで分け合って吸っているのです。

海は平均すると0・五mmしかなく、その下にあるのは四mm位の薄い皮が十数枚ぶかぶか浮いてる。どこに浮いているのか。地球の中は、火山の活動を見るようにどろどろに岩が溶けたマントルです。熱い味噌汁の中で、味噌がぐるぐるぐる廻っているように地球の中でもマントルがぐるぐる廻っています。そのマントルの海の上に十数枚四mm位の地層が浮いているのです。その浮いている皮がお互いに衝突して押されバンと跳ねると地震になるのです。そういう地震によって日本列島もでき、日本列島自身が実は地震でできています。今回東日本で大変な災害が起りましたが、あの災害は決して東日本だけの問題ではなく、私たち全ての人たちが覚悟しなくてはならない災害でした。私の前任校が仙台の県立大学で、知人が何人も被災し亡くなった方もおられる。やはり人ごとではなく自分のこととして、あの災害を考える必要があるのではないかと思います。

かつて夏目漱石のお弟子さんの寺田虎彦は東京大学の物理学教授で、有名な言葉を残し

ています。「災害は忘れた頃にやってくる」それを裏返すと、忘れなければ災害は来ないのかということにもなります。

西暦四六九年貞観地震がありました。その時に今回大きな災害をうけた仙台市のはずれにある多賀城に、三〇mクラスの津波が押し寄せてきたという証拠が残っています。そのことを東北大学と北海道大学では見極めました。しかし残念ながらそれを発表した今から二〇年前はバブルの時代で、大津波が来るとなったら折角開発した土地が売れないことになり圧力がかかって、科学研究費をカットされ、研究が中止されてしまいました。それが今回の災害にもつながっていると考えるよるしいかと思えます。

自然は、人間と違って嘘はつかない。しかも嘘をつかないだけではなく、証拠をちゃんと残す。だから自然は隠さず残してくれるから、それをきちんと覚え忘れなければ、災害は防げるかもしれない。非常にこれは重要なことです。今回の3・11という事件は大きな犠牲はあったが、自然とのつき合い方を私たちに教えてくれました。自然とのつき合い方にはパターンがあつて、

- 1、征服型、人間の便利のように自然を作り変える。行きすぎると滅亡につながる。
- 2、自然を守る型、自然を完全に保護するが

大事に保護することは、人間が住めなくなる人類の存在否定になる。  
だから一と二とを含む中庸が大切ということ

とになります。

原発反対と推進の話があるが両極端ではない。良い面、悪い面の両方について話し合つてよりよい着地点、中庸をみつめる事が大事。戦いからは何も生まれない。

災害があつたことを忘れないことがこれからの重要なこと。災害は忘れた頃にやってくる。科学技術には想定外があつてはならない。しかし人間はミスをするので想定外がなければ生きていけない。

## いのちの話

いのちって何でしょう。壺や花にはいのちがあるでしょうか。いのちと物との違いは、自分で意志があつて自分にあつた環境を求めて動いていく、これがいのちを持つているものの特徴です。次から次に譲り渡していく。いのちには始まりがあり、終わりがある。物といのちの違いについて、別の視点で見ると、空気にはいのちがあるでしょうか？

空気は窒素や酸素の小さな目に見えないつぶがたくさんでたために動いて、まんべんなく行き渡っている。空気にはいのちはない。いのちは、でたために動くものごとがっちりとした規則の中間にある。つまり完全に規則正しく原子分子がくつついているものはいのちとはいわない。

水は、酸素、水素からできている。

赤ちゃんのからだの約七二%は水ででき、皆さんの体の六〇%は水でできている。じつは、体は六〇兆個の細胞からできている。細

胞の中の水は細胞膜がくるむことでいのちの元ができています。水といのちは関係がある。

北極熊は、もともとは暑いところにはいたが、北の方にいって北極熊になった。非常に面白い体の構造で、毛の中が空洞になって保温効果がある。また脂肪が厚く沢山の物を食べて冬はなにも動かず寝ている。地球の薄皮饅頭のような地盤の変化と共に北方に移動していき、自分の体を変えて自然に合うようにした。

人間は自分の体を変えないで、相手を変えようとした。これは動物と人間の大きな違いです。ノートルダム清心女学院理事長である八六才の渡辺和子シスターはよく仰有います。「ひとを変えることはできない、あなた自身を変えなさい。」また、咲きなさい「神様があなたを置いたところできれいな花を咲かせなさい。小さな花でもかまいません。」と教えて下さった。

自然と色々関わりながら生き方を模索していく中で、非常に重要なことは、両極端に走ってはいは物事はできない。AとBを足すのではなく、お互いに認めながらAとBを含むような視点に立って、新しいステップから見るとこれを中庸といいます。

### 寄り添う

ラテン語でクレメンティアという。

マザーテレサについて心に残っている言葉は「私は医者ではないので病気を治すことはできない。一つ私にできることは、今亡くなるうとする人にあなたが亡くなるまでどんな

ことがあってもあなたをはなしません。そしてあなたが亡くなったとしても、あなたを神様の所にお連れするお約束をしますと寄り添ってきた」と語られたことです。

### 地球と環境・生き物

創世紀は、二酸化炭素がいっぱいだった。その時に二酸化炭素を食べ物にしてバクテリアがいっぱいいた。微生物は二酸化炭素を食べて酸素を作っていた。酸素ができたために、その酸素と太陽の光が一緒になってオゾンができ、そのオゾンが、太陽の光に含まれている多くの放射線をカットすることができた。植物はクロロフィル葉緑素で二酸化炭素を食べ酸素を出す。クロロフィルの原子構造をチョット変えるとヘモグロビンになる。ヘモグロビンは血液の材料で、呼吸で酸素を二酸化炭素に変える。二酸化炭素を美味しいと言って食べる植物は、酸素を食べる動物をつくった。植物と動物はお互いに助け合いながら生きています。地球の環境と生き物は、お互いに助け合いながら生きてきた。

どのように一緒に生きてきたかを伝える役割を持っているのが科学者なのです。

### 魚と人間

人は瞬きをする。目を開けたままでは目は痛くなる。しかし魚は瞬きをしない。何故でしょうか。魚はいつも水の中にいるので、瞬きをする必要がない。では何故人間は瞬きをするのでしょうか。

その答えは、皆さんは昔は魚だった。魚だっ

たときの記憶が忘れられなくて、目は濡れていないといけないと思っただけで瞬きをしているのです。その証拠に、お母さんのお腹の中で受精卵から二八日目の映像を東京大学産婦人科で見てもびっくり仰天です。魚そっくりです。

前の胸ひれが両手となり、後ろのひれが足になっていきます。皆さん魚だったのです。つまり何故瞬きをするかというところから、魚だったということまで分かるのが科学なのです。実際地球が何十億年もかかってやってきたことをお母さんはお腹の中で一年足らずでやってしまふ。これが生き物なのです。

### 人間の進化

私たちの祖先は、猿だったといわれている。どうして猿から人間になったのでしょうか。その理由は大地震です。

アフリカの地殻変動から人間は生まれました。アフリカで地震が起き山が隆起して二つの山ができました。山から吹き込む風は上方に行き雲ができ、雨になり木が育つ。また山と山の間に、カラカラの乾燥地帯ができ、木の上で生きていた猿は困って木から降り二本足で立ち上った。結果大きな頭(脳)を支えるようになり、考えることができる人間になった。考えることは、自分が経験してなくても想像することができるようになり、人の痛みも想像できるようになった。立ち上がるにより骨盤が小さくなって、出産が難しくなり、妊娠期間四〇週となったため人間は未熟な状態で生まれることになった。だが

ら未熟なままで生まれた人間は、教育しない  
と一人前にはなれない。人間として、みんな  
で協力して子供を育てる。人間は他の人を助  
け共同生活し団結する。

美味しい水が出る土地があると、それを奪  
い合う。これは自分の仲間への愛であるが、  
他との戦いは憎しみであり、人間は愛と憎し  
みの両極端を持っている。

良い生き方をした人は、良い死に方ができ  
るといわれている。

言葉が分からなくても音だったら分かる  
ということがある。

(ここで北亜矢子さんの演奏)

ドビッシーの「月の光」月夜の森の静けさ。

ショパンの「ノクターン」遺作嬰ハ単調

せつなさから慰め、悲しみ、諦めから平安、  
神の招きを表現。

リストの「愛の夢」第3番、愛の苦しみが  
交錯した心の表現。

時間の流れ・金子みすず

私たちに時間は見えないが、感じる時間は  
たしかにある。過去は過ぎ去ったものだから  
もうない、未来はまだ来てないのだからまだ  
ない。では、現在はあるのだろうか？ 過去  
と未来の間にある現在のはたしかに何か過ぎ去  
るという感覚はある。感覚は何で作っている  
かという人間の鼓動で勘定している。

つまり私たちは鼓動で生きていて、時間と

いうのは自分でつくりあげていくもの。これ  
までの人生がどうであったにせよ、明日から  
どう生きるかによって過去が意味のあるもの  
になる。過去の集積の上に今があるので、こ  
れからの生きかたで過去は良くも悪くもなる。  
私たちに関係なく天体現象は変わるように  
見えるが、天体現象には神秘的な大きなリズム  
があつてその中に自分をどういうふうにな  
まくいれるかによって、人生が豊かになると  
思う。(TV番組映像紹介 桂サンシャイン  
氏と佐治氏が出演の伊勢神宮紹介と、バッハ  
のプレリュード挿入のあと夫婦岩での金環日  
食の実況)

番組のなかでも耳が大事ということを言  
いましたが、耳が不自由な方も私たちが聞こえ  
ないものを必ず聞いて感知していらつしやる。  
全盲の方、天才的ピアニストの辻井伸行君は、  
見えている僕らが何も見えていないと思うく  
らい見えている。私たちは聞いている音、雰  
囲気をもっと広い意味で理解した方が良い。  
私たちが見たり、聞いたり、触ったりしてわ  
かるものはごく一部だけ、そのことを非常に  
美しく例えたのが金子みすずです。

(詩「星とたんぽぽ」を朗読)

中田喜直先生がみすずの詩に感動して作曲  
されピアノ曲にしたものを聞いていただきま  
す。(ピアノ演奏)

時間

最後になりますが、非常に重要なのは時間、

それを良くするも悪くするもあなた次第。哺  
乳類は三〇gのハツカネズミも一〇tの象か  
鯨でも二〇億回の鼓動で心臓は止まる。ハツ  
カネズミは一秒に一〇回で三年、鯨は五秒に  
一回で八〇年生きる。人間は本来五〇歳で一  
生を終える、しかし医療技術で八〇、九〇年  
まで延びた。だから生物的な二〇億回の鼓動  
を全うすることが生きていくうえで一番大事  
なこと。それができないときどう助けるかが  
現代の医療でなければならぬ。

死という言葉が日本ではタブーのように言  
われるが目前で亡くなる人を見ることで、生  
がどういふものかわかってくる。

伊勢神宮も二〇年に一度の遷宮で千年続い  
てきた。個体が亡くなっても命を譲り渡して  
いくことに生物の役割がある。

百年後ここにいる人は誰一人生きていない  
はずだけれど百年後はきつとある。そこで、  
今やるべきことは何かを考えながら生きてい  
きたい。

体を作っている一番大切なものは炭素です。  
結合の仕方ではA君B君になる。星の中で炭素  
が生まれ、しかも星が大爆発して死ぬことで  
生命は生まれた。ここにいるすべての人が星  
の王子様、王女様です。今日お会いするのは  
四三億年ぶり、お久しぶりです。

(ピアノ演奏「星とたんぽぽ」「夏の思い出」)

(編集者 久世・島津・橋本)

## 市民の会を考へる死と生之み



### 第一四回 記念講演会 感想

物理学者であるということをお聞きして、とても難しい話になるのではと思っておりましたが、佐治先生のピアノ演奏とともに月探査衛星「かぐや」の映像が流れ、なんともいえない穏やかな気持ちになり、どのようなお話がなされるのかとても楽しみにしました。

人間は自分達の都合で自然を変化させて生きていますが、その弊害として自然が崩壊し、環境が汚染されてきています。環境が汚染さ

### 記念講演会参加者アンケート55人の感想抜粋

れることにより、人間は健康に影響を受け、生きることが難しいことになるでしょう。つまり、人間が生きるといことは、自然との共存が大切であるということであらためて感じることができました。

そこでどのように行動するか、どのように生きるか考えることが大切であるということではないでしょうか。今回の講演では、様々な側面から「私達自身生きるとは何か」を考へることが出来る有意義な時間を戴き感謝しています。

(井村)

\* 生きることの意味、死ぬことの意味を何も感じないままま過してきたように思い、今の自分の存在が神から授けられた貴重な時間だと感じた。

\* 宇宙を科学することが、これほど意味深いことであることも感じることができ、本当に幸せな気持ちです。

\* これからどうするかによって、自分の過去の価値が出てくる。無駄ではない、そんな感覚。良いお話でした。

\* 心が和らぎ希望を持ちました。

## 勉強会報告

### 第一回 勉強会

日時 平成二四年五月一九日(土)

一三時三〇分～一四時五〇分

場所 三重県総合文化センター

第一リハーサル室

### 講演

「生きる喜びを共有する

音楽療法」

— 緩和ケアにおけるこころの交流 —



講師 教授  
鈴木短期大学 佐治 順子 氏

言葉ではなく、音楽でお互いの気持ちを分かちあうとは、どういうことなのだろうと、常々知りたく思っていました。佐治先生は市民にも分かりやすく、東日本大震災の被災地での音楽療法からお話を始められました。この勉強会でも、自分の腕を振るだけで音が出るトーンチャイムを使うと、澄んだ音に心なごむ不思議な時間を体験しました。先生は避難所の中で、そのような方法を使いながら「荒城の月」や「おじいさんの時計」を皆で演奏されました。合奏の一音一音は欠かすことのできない繋がりの中に居ることを感じさ

せませす。この一回ではなく、何度も繰り返したいと思う気持ちに被災者におこり、やがて対話、そして笑いを引き出したことを紹介されました。

この例をみても「音楽を通じてクライエントの潜在能力を引き出し、機能を改善促進させるために、相互人的に援助すること」を佐治先生は実践されているのだと思います。音楽療法学は総合人間学として、コミュニケーションの中心に位置するように感じます。

さて音楽の刺激は、生理的・心理的・精神的状態の変化を引き起こし、身体リズム、特に呼吸に影響するようで、「息が合う」とは正しくこのことですね。もう一つの長年の実例で、認知症の方が、歌詞を忘れても旋律を、リズムはその方なりに残して、心に反応することを「荒城の月」への聴取で示されました。病を得て失意の中を帰

国した作曲家滝廉太郎の悲哀の人生が、その曲を想いの深いものに仕上げているのでしよう。音楽がコミュニケーションの底に関わることを感じずにはおられません。

音楽療法の実践は、ここからの避難所という場の提供であ



り、緩和ケアとの関係でもWHOの言う四つのペインを緩和する方向から働きかけるものです。音楽療法の「すべてを受け入れ、寄り添う」「共に歌い、語り合う場を持つ」「可能性を信じる」は、まさしく緩和ケアの一面と通い合っています。(遠藤)

## 第二回勉強会・第一回語り合いの会

日時 平成二十四年二月一六日(日)

場所 三重県総合文化センター

生活工房(フレんテみえ)

講演 一三時三〇分～一四時三〇分

語り合いの会

一四時四〇分～一五時四〇分

### 演題 「世界の看取りの文化」



講師

大西 和子 会長

日本社会において少子高齢化が進行しており、二〇五〇年には高齢化率が三五%を超えるとされています。一方、死亡数は出生数の三倍になると予想され、日本の人口が減っていくこととなります。このような状況で、看取られる人、看取る人の環境も自ずと変化しています。

日本の経済成長が始まる以前は、病院死が少なく在宅死が多くを占めており、葬式は親しい人に見守られ土葬されることが多くありました。しかし、一九七五年を起点に在宅死と病院死が逆転し、今では八〇%以上が病院死で、他の国と比較しても日本は最も病院死率が高い国です。そして、国の法律では定められていませんが、現在土葬ではなく火葬が一〇〇%近くになっています。また、個人の墓地や墓石をもたない人も増えています。

高度経済成長に伴って、医療の進歩、平均寿命の伸展、大家族から核家族、大都会の人口密集地域から過疎地域など、急速な社会現象の変化のなかで、以前のような看取りや墓守を期待することが難しくなっています。

そこで、他の国と日本の看取りにおける環境の違い、葬式の違いなどを通して、日本の特質、更に個人の価値観(或いは死生観)、考え方などの話し合いができればよいと思います。そして、どこで誰にどのように看取られたいか、そのために今からどうするかを考える時間になればと思っています。

### 参加者の感想

高齢化社会は、言い換えれば多死社会でもある。近い将来、自分の身近なところで看取りの機会が必ず訪れるということ、個人的にとっても興味深いお話だった。死についての考え方は、国や地域で差がある。世界にはそ

それぞれの歴史的背景や社会情勢などの影響を受けて、さまざまな看取りの文化が形成されていることを学んだ。自分とは考え方が違って、相手の文化尺度を認め、尊重することが大切であるとも学んだ。

私にも高齢の両親がいるので、これを機に本人達にとつてのQOLは何なのかという視点で考えてみよう。そのためにはお互いに話し合う必要があると感じた。(久世)

## 施設見学会

会場 済生会松阪総合病院緩和ケア病棟  
日時 平成二四年一二月二〇日(木)

今年四月に県下六番目に開設された済生会松阪総合病院緩和ケア病棟の見学会を開催いたしました。

緩和ケア科部長の村井美代先生、中西容子課長様より緩和ケアの取組、入院患者さんの背景などのご説明をいただきました。緩和ケア病棟の理念「病と勇敢に向き合いながら清らかで深い愛情をもって患者さんとご家族様に寄り添います」(村井先生作)のもとに村井先生を中心に二五名の看護師が済生会病院らしい緩和ケアを目指し取り組んでいる。

四月からの入院患者数は一一五名、入院の目的については八割がターミナルの方、他に疼痛コントロール、化学療法の治療の間に体

調を整える、レスパイトケア(家族の休息のための一時入院)など緩和ケア病棟の利用目的が変化してきた。患者さんは、近隣の病院からの紹介が主である。平均在院日数が約三五日と長い。予約待ちの方は常時一〇名ほど。地域の在宅医療機関との連携や在宅がん患者さんを診る医師の後方支援などを病棟の役割と考えている。

説明後、三グループに別れ七階の病棟を見学させていただきました。既存の病棟を改装したとは思えないほど明るく、窓からは伊勢湾、松阪城跡、堀坂山と素晴らしいロケーションで患者さんやご家族の緊張したお気持ちを解きほぐしてくれるものと思います。コミュニケーションルームの中央には天井まで届くようなクリスマスツリーが飾られ、各病室の入り口には患者さんやご家族が作られたクリスマスリースが可愛く並んでいました。病棟全体にスタッフの細やかな気遣いを感じられゆつくりとした時間が流れていました。満室のため病室内は見る事ができませんでしたが、家族室やボランティア室なども整えられています。

最後に、質疑応答の時間をいただき、参加者は一三名と少数でしたが大変充実した見学会となりました。年末のお忙しい時期に見学会をお引き受けいただきました病院の皆様、本見学会の調整等をしていただきました村木がん看護専門看護師様にお礼申し上げます。(北村)

## 第一五回総会報告

日時 平成二四年五月一九日(土)  
一五時～一六時

場所 三重県総合文化センター  
第一リハーサル室

- 一. 会長挨拶(大西)
- 二. 総会議長選出(遠藤)
- 三. 平成二三年度活動報告(井村)
- 四. 会計報告(平松)
- 五. 会計監査報告(土田・久田)
- 六. 平成二四年度活動計画(案)(喜田)
- 七. 平成二四年度予算(案)(樋口)
- 八. 規約改正

1. 規約の第5条(役員構成)  
旧…会長1、副会長2、幹事2名  
改正箇所…副会長3名、幹事1名  
事務局長1名、会計監査1名
2. 規約の第6条(任期)

旧…役員  
改正…役員・運営委員  
を提案した。いずれの提案も過半数以上の賛同を得て可決された。

前日まで天候に恵まれず、総会と勉強会に来て頂く方の心配をしていましたが、皆様の日常の心がけと熱意が天に伝わったのか、天候に恵まれたなか、勉強会と総会を開催することができました。ただ残念なことは、参加者が若干少なかつたことです。

総会は一年に一回のことであり、一年の内容を決定する場です。総会で多くの会員の皆様と顔を合わせ話ができる機会でもあり、そこから何か生まれるのではないかと思っています。是非一人でも多くの方が参加されることを会員の一人として願っています。(井村)

## 今後の予定など

### 第三回勉強会・第二回語り合いの会

日時 平成二五年二月一日(月・祝)  
場所 三重県総合文化センター

生活工房(フレんテみえ)  
講演 一三時三〇分〜一四時三〇分  
語り合いの会

一四時四〇分〜一五時四〇分  
演題 「世界の看取り、意思表示の仕方と事前指定書」

講師 鈴鹿医療科学大学教授 葛原茂樹氏  
神経内科医としての長いご経験から、がんに限らず、神経疾患や高齢の末期の患者さんにこそ緩和ケアが必要だと考えられます。

### 平成二五年総会・第一回勉強会

日時 平成二五年四月二〇日(土)

場所 三重県総合文化センター・大会議室  
講演 一三時三〇分〜一四時三〇分  
演題 「禅僧の生死観」  
講師 衣斐弘行氏

玄侑さんの招請にはお骨折りをいただきました。事前の勉強会講師もお願ひしています。



### 発定一五周年記念講演会

日時 平成二五年六月一九日(水)  
場所 三重県総合文化センター・中ホール  
オープニング(鈴鹿混成合唱団)

一五時〜一五時二〇分  
講演 一五時二〇分〜一七時

演題 「無生死の道」



講師 玄侑 宗久氏

福島県三春町 福聚寺住職。一九五六年、福島県生まれ。慶応大学中国文学科卒業。さまざまな職業に就いた後に二七歳で出家し、僧侶と作家の二つの道を切り拓いている。二〇一一年、東日本大震災に遭遇し、政府による東日本大震災「復興構想会議」のメンバーに選出される。原発問題を中心に震災と向き合い、多くの情報を発信している。(写真・略歴は公式サイトより引用)

私たちの日常の「生」が多くの「死」を礎にもたらされていることを、震災で改めて知りました。しかし、人間は忘れやすいものです。また、無かったかのように為政者は誘導し始めています。その地域で生きることをもつて成されている玄侑さんに、今の時期だからこそ、直に聴き、私たちが自らの生と死を考えたと思います。

### 風の街の文化祭(医療相談室)

平成二四年十月二八日(日)  
鈴鹿ハンターにおいて、当会の平成二四年度事業「医療に関する何でも相談室」が今年も行なわれました。

今年度は、サービスカウンター前の広いコーナーにブースを設置し、店頭やイベント会場等で来店客に声掛けをしながら手作りチラシを配布して相談者を募りました。

アドバイザーは医療従事者五名とし、相談者のお話にしっかりと耳を傾け、相談者の悩みや困っていることに個々にアドバイスをして頂きました。相談者は計一二名で、その内訳は、男性二名、女性一〇名でした。

当日は朝から激しい雨に見舞われ、店内の客足も少なく、そのなかで訪れた相談者から地域の中で気軽に相談できる場所があったことに「ありがとう」の感謝の言葉を頂きました。(加藤)

### 編集後記

福島の原発事故もまだ現在進行形であり、東北の震災被害者たちも展望の見えぬままに歳月が過ぎていきます。日本はこの先どうなるのでしょうか。どんな終末期をむかえるのかとか、自分らしい死生観を確立しようなどと考えるのは暇な人たちよ、と言う人もいます。しかし、いつの時代にも多少暇のある人々が文化を創ってきたことを記憶しましょう。(S)